吉田昌夫著

『東アフリカ社会経済論
――タンザニアを中心として――』

古今書院　1997年　xi＋376ページ

半澤和夫

I

本書は34年間アフリカ，とくに東アフリカの研究に専念されてこられた著者によるこれまでの研究の集大成ともいうべきものである。著者はわが国における社会科学部門，とりわけ農村・農業発展，土地制度や農産物流通組織などに関するアフリカ研究分野の第一人者である。その著者がこれまで発表した論文の中から抜粋して1冊にまとめたのが本書である。

一口に34年間とはいえ，アフリカ（ここではサハラ以南のアフリカ）研究においてはさまざまな点で困難を極める34年間ではなかったかに思う。植民地支配から脱出し，多くの国が独立し，「アフリカの年」と呼ばれたのが1960年である。著者がアフリカ研究に着手されたのはその頃である。交通や情報の発達により，今日ではアフリカはそう遠くない存在になりつつある。日本人の老若男女がサファリツアーに出かけることも，インターネットでアフリカの最新情報を手にすることもできる。しかし当時は，農村での現地調査はともかく，安全で健康に暮らすだけでも並大抵ではなかったと想像できる。

本書は東アフリカ，とくにタンザニアにおける植民地化以後の社会経済発展の過程を分析することを狙いとしている。分析方法としては，文献資料，著者自らによる聞き取り調査や観察，住み込みによる住民との対話などによる情報収集とその分析が中心である。地域研究の手法が大いに利用されている。

II

なぜ研究対象がタンザニアなのであろうか。著者によれば，「タンザニア社会と経済の構造が，東アフリカ三国のなかでは最も典型的なアフリカの特徴をもって」（iiページ）いるからである。つまり，東アフリカという地域を対象として研究を志したときに，アフリカらしい国がタンザニアだということである。

日本におけるアフリカ研究者の中で，タンザニアはかつては特別の思い入れがあったのではないだろうか。評者もその一人である。ニエレレ (J. K. Nyerere) 初代大統領の唱えた「ウジャマー」(Ujamaa) という言葉の響きは魅惑的であり，アフリカの未来に明るい展望が描かれる言葉であったように思える。

「アフリカ社会主義」の実践的試みが「アルーシャ宣言」(1967年）とともにタンザニアで着手された。しかし，その試みはやむなく断念されることになる。その点はともかく，「『国家による土着社会の包摂』と呼ぶようなマクロとミクロの接合関係」（iiページ）を分析しようとすれば，タンザニアは絶好のサンプルとなるであろう。

本書の狙いとして著者は，「アフリカ内部からの，すなわち内発的な社会経済発展の契機が，外部からの国際政治経済的な圧力あるいは動因によって，破壊ではなくどちらかというとゆるやかに包摂されてきた過程を，タンザニアを事例として明らかにする」（iiページ），と明示的に述べている。そしてそれを検証するために，著者は「制度」の形成とその実態の変化を明らかにしようとする。この視点については，「実ははっきり自覚していたとはいえない」（iiページ）と著者は言及しているものの，本書に貫かれている視点に違いない。

III

本書の構成は以下のとおりである。

I　東アフリカの社会的編成

II　タンザニアの土地保有制度と農村社会

Ⅲ　東アフリカにおける農産物流通組織の担い手
Ⅳ　タンザニアの小農経営構造
Ⅴ　タンザニアにおける「社会主義」的農村開発政策
Ⅵ　タンザニアにおける共同体的土地保有制度の変容と現状――北パレ農村の土地利用からみた制度問題――
Ⅶ　タンザニアの都市社会と国家セクター
Ⅷ　結　語

このように，本書ではかなり多岐にわたる問題が扱われている。その点はともすれば，焦点が不明瞭だと読者が受け取るおそれを生む。しかしある地域の特徴や性格を解明しようとするとき，いかなるディメンジョンを抽出し，どの部分を取り除くかはきわめて重要な点である。地域研究という性格からすると，本書にみられるこの多様性が実は生きてくるのではないかと思われる。

第Ⅰ章では，アフリカ人のエスニシティや非アフリカ人，そして植民地行政について論じられている。東アフリカ社会の特徴について，「植民地化が西アフリカに比べて遅れて始まったことと，伝統的社会組織そのものの形成が比較的新しく，より流動的な状態であったことのため，外からの衝撃に対してより柔軟に自らを転形することにより，包摂されてきた」（1ページ）との仮説を提示している。また，アフリカ学会でも論争が続いている「部族」ないしは「民族」という言葉，あるいはそれらの定義に関して著者の見解が述べられていることも大変参考になる。特定集団の名称については何々族，一般名称についてはエスニック・グループとして著者は呼んでいる。このエスニック・グループが植民地統治の確立過程で固定化されたという視点は重要である。

第Ⅱ章では，土地制度をめぐる諸問題を考察し，農村社会の特質が明らかにされている。アフリカ社会を分析しようとするとき，土地制度をまず最初に取り上げている点は正当な視点であり，著者の高い見識がうかがえる。タンザニアの土地政策は，白人入植優遇か原住民小農優遇かの選択をめぐる問題から出発したが，「マジマジの乱」（1905～07年）を契機にアフリカ人小農振興策に傾斜していく。土地保有制度の改革をめぐるM・ユーデルマン (Yudelman) とB・ブロック (Brock) の論争を整理し，考察している点はとくに重要である。現在でもというべきか，あるいは現在においてこそというべきか，いずれにせよ，アフリカの農村・農業発展を検討する上で，さらには経済，社会，政治の将来を展望する上で，土地保有制度とその改革をめぐる諸問題は欠かせないキー・イッシューである。さらにこの章では，南部のニャキューサ (Nyakyusa) と北西部のスクマ (Sukuma) の2つのエスニック・グループを具体的に取り上げ，土地保有制度に関する既往研究を整理しながら，その実態を明らかにしている。ともすれば，アフリカの慣習的土地保有制度が概念的に，そして一様なものとして議論される傾向がみられることもあるが，著者はそのことを暗示的に批判しているものと思われる。

第Ⅲ章においては，東アフリカにおける農産物流通組織，とくにその担い手が論じられている。農村・農業の社会経済発展論の展開において，そして内発的な社会経済発展の契機を捉えようとするとき，農産物流通制度の変容過程を考察対象とすることは，土地制度とともに重要な視点のひとつである。植民地化によって商業活動が一段と発展するが，植民地政府の統制もあり，3層の商業活動が固定化された。すなわち，それはヨーロッパ企業を頂点に，中間にはインド人の商人や商社，そして最下層にアフリカ人商人という構造である。この構造を，インド人ではナンジー・カリダス・メータ (Nanji Kalidas Mehta)，アフリカ人についてはアリ・ミゲヨ (Ali Migeyo) を事例として取り上げ，考察している。そして独立以降の展開として重要なアフリカナイゼーションの過程を，代表的な輸出農産物である綿花とコーヒーを対象に考察している。協同組合がその考察の中心となる。

第Ⅳ章では，タンザニアにおける小農の経営構造を，ルフィジ河 (Rufiji) 下流地域とスクマ地域での実態調査に基づいて明らかにしている。前者においては遠い将来灌漑農業の導入が見込まれるが，それに先だって農業の実態を，著者自らの調査に基づい

て正確に把握しておこうという意図によるものである。後者は綿花の主産地であったが，R・D・シャルマ(Sharma)による実態調査のデータに基づいて綿花栽培の拡大が自給食料生産の犠牲によるものなのか，あるいは生産力の拡大による商品生産の進展として捉えられるのかが議論の中心である。ルフィジ河下流地域の農業には圧倒的な自然の力に対応した小農たちなりの知恵の発揮がみられ，またこの地域では漁業もコンスタントな収入源として重要な副業であるので，ダム建設においては十分な注意が必要であるとの結論を導いている。

第V章では，J・ニエレレの「アルーシャ宣言」以降のタンザニアにおける「社会主義」的農村開発政策とはどのようなもので，どのように展開されたかが詳細に分析されている。社会主義的農村開発の挫折は，「タンザニア型の小農輸出経済構造をもつ国が，経済発展と社会的平等を同時・並行的に追及しようとする際に，必然的に直面する問題」(202ページ）であるが，しかし従来の都市集中の公共投資を農村に転換し，地域的バランスのとれた経済発展を実現するための基礎を築いた，と著者は評価している。

第VI章においては，第II章で取り上げた土地保有制度を，今度は現代的課題を念頭に置いてキリマンジャロ山麓の北パレ(Pare)の実態調査に基づいて検討している。いうまでもなく現代的課題とは，土着的な共同体的土地保有制度から個別的な土地保有制度ないしは私的所有制度への転換であり，構造調整政策のもとでの市場経済化，自由化の動きに直結する問題である。したがって著者が土地保有制度の分析を再度ここで取り上げたことは，この部分がおそらく著者がとくに力点を置いた部分であると想像できる。J・W・ブルース(Bruce)，D・ビーバイク(Biebayck)などの土地制度改革をめぐる諸説を冒頭で紹介しており，大変参考になる。調査地のンドルウェ村(Ndorwe)はアラビカ・コーヒーの主産地として名高いキリマンジャロ州にあり，市場経済の発達した地域である。このような地域の一農村において，土地利用と土地保有制度の変化を現代的課題をふまえて分析するところに著者の着眼点の鋭さがある。この地方では乾季用としての溜池灌漑システムが発達しているが，この村でもそれが現在でも十分に機能している。この村では共同体的土地保有制度の規範がまだ残っており，現行の制度自体は農業発展の大きな桎梏ではない，と著者は述べている。

第VII章は，都市社会を対象にしており，労働組合の歴史的変遷，組織労働者の政治経済的地位の変化，国家と労働者との関係が分析されている。さらに，労働組合と国家セクターが政策の変化に対応してどのように変化していったかを分析している。この「国家セクターの就業者」とは一般的には官僚のことであるが，「権力者の恣意を排除した合法的・合理的支配の組織に従事する者としての官僚は，タンザニアには存在しない」(312ページ）との理由で使われる言葉である。

第VIII章は本書の結論である。タンザニアの農村と都市はどのような社会変容を遂げてきたのか，G・ヒデーン(Hyden)の「国家に捕捉されない強い小農」とN・カスフィア(Kasfir)の「市場経済から逃れられない小農」という，小農の性格づけをめぐる議論をふまえた後で，著者の見解が提示される。それによれば，市場経済の浸透と国家という枠組みによって農村社会といえども，国家の法的規制を無視して存在できなくなったという意味で，「自立性を失った存在」である。しかし他方で，農村社会は「国家の政策がそのまま浸透し得るような，国家に統括された社会ではない」(351ページ)，と著者はいう。そしてさらに，「国家に捕捉されない，慣習法上の世界」(同）が農村地域に存在するという。土地制度にみられる自立性・地方分権性，そして商品流通にみられる世界大への開放性が同時に存在することから，西欧的な尺度による段階論，すなわち単線的な「近代化論」は不適切だ，と著者はいう。ではいったい，著者が考える「発展」とは何か。試論的と限定付きではあるが，「複線化した発展の理解」を著者は提唱する。つまり，それは社会の発展度を「市場の発展度を基準にして測るのではなく，異なる分野に異なる尺度を使って測る」(353ページ）必要性である。より具体的には，「住民の生存権と環境の保全を保障しながら，土地利用の高度化をも達

成」(同) できるような社会が高く評価されるべきであるとする。

Ⅳ

すでに述べたように，本書は著者が過去に発表した論文の中から選んだものをまとめたものである。したがって，そのためにどうしても読みにくくなる傾向がある。「はしがき」で若干言及しているものの，課題設定が十分に開示されていない点もそれに禍していると思われる。本書のタイトルは社会経済論であるが，内容としては社会経済発展論である。著者が「発展」をどう捉えているのか，本書を読み進めていく過程でそれを強く意識せざるを得ない。しかし，結語で提示された「複線的発展論」は具体的であり，現代的捉え方として評価されよう。

「共同体桎梏論」，「市場邪悪論」というステレオタイプの見方で著者が東アフリカを捉えようとしているのではないことは明白である。著者は，地域研究の手法でタンザニアの歴史や個性を明らかにしているからである。にもかかわらず，社会経済システムの進化の方向がどう提示されているのであろうか。また，政策提言，とくに日本の援助政策に関する提言がほとんどなされていない点は大変残念である。

これは細かい点であるが，土地制度の分析においてやや不明な点がみられる（第Ⅵ章)。共同体的土地保有制度の枠組においても，土地利用権の貸借関係が広範にみられる。借地面積に関係なく，土地を借りているほとんどの農民は貸し手に借料 (mbuta) として地酒一壺を支払っている。その経済価値はわずかであり，お礼の意味である，と著者は述べている。ところが，同じ村で借地での収穫物の半分を借料として支払っている農民がいる。それはなぜであろうか。情報が不完全だとも思えない。諸条件が異なるのであろうか。

Ⅴ

著者が「はしがき」で述べているように，東アフリカ，とくにタンザニアの社会と経済の全体像を提示できるような研究書は確かに皆無に等しい。その意味においても，本書はアフリカ研究者のみならず，アフリカに関心をもつ人々にとって大いに参考になる，貴重な研究書である。

先にふれたように，政策提言がみられないという点では，本書はきわめて控え目である。読者の一人としてその理由を解釈すれば，最近の一部のアフリカ研究に対する著者の警鐘を感じ取らずにおられない。もしそうだとすれば，それは表層的なアフリカの理解，地域研究という姿勢を欠いた調査研究に対する静かなる批判とも受け取れる。

ホリスティックに対象地域を捉えようとする著者の姿勢が，本書からひしひしと伝わってくる。著者は研究者として長年，アジア経済研究所に在籍された。著者の研究手法や視角はここで培われたに違いない。その組織再編（日本貿易振興会との統合）後も，このような伝統は受け継がれるべきである。そしてアフリカ研究の後学にとっても，本書は著者の方法論と研究者としての姿勢を学び，さらに今後の研究課題を発掘できる宝の山であるように思う。

（日本大学生物資源科学部助教授）